

小川未明の漢詩——高田中学時代の詩業

増井 真琴

はじめに

夏目漱石にせよ、森鷗外にせよ、作家研究において、漢詩はもつとも遅く手が付けられる研究領域であろう。研究者と言えども、和語を読むようには、漢語は読めないからであり、端的に言ってしまうえば、読解が難しいからである。

小川未明研究においても、事情は異ならない。高田中学時代の未明（明治二八～三四年）が漢詩を物していたことは、これまで、福田清人や上笙一郎によって報告されてきた<sup>①</sup>。福田は、雑誌「中学世界」へ投書されていた五篇の漢詩を、上は、友人・飯田庄八宛の書簡に封入されていた四篇の漢詩を、それぞれ紹介している。が、これらの論考は結局のところ、資料紹介の域を出ていないのが実情だ。語釈・通釈・評釈は無論、読みの基本である訓読文（読み下し文）すら、施されていないからである。

福田は、未明の漢詩について、「未明の漢詩がどのような個性の閃きを示しているか判断することはむづかしい。それは漢詩というかなり形態的なものが先行する文学ジャンルにもよる」と論評しているが、解釈以前の基礎的作業を行っていない以上、「個性の閃き」など、わかるはずがなからう。筆者は、文壇処女作「漂浪児」（「新小説」明治三七年九月）から遡ること、約四・五年前に書かれた高田中学時代の詩業——初期習作群——に、後年の未明の文学世界と連なる「個性の閃

き」が潜在していると考える。

そこで本稿では、従来、正面切って分析されることが皆無だった少年未明の漢詩について、新資料も交えながら、鑑賞を試みるとともに(二・三節)、その技巧(技術的な質)と思想(内容的な特質)を見定め、後の文学作品との質的連続性を指摘したい(四節)。さらに、これらの漢詩が、日本の近代漢詩史上、どのような位置を占めているのか、文学史的な観点から考察を加えたい(五節)。なお、上記の作業に先立って、明治一五年生まれの未明が、少年期に漢詩・漢文をいかにして学習していたのか、明治中期の「漢学」受容も明らかにする(一節)。

つまり、小川未明研究の範囲を「漂浪児」以前に遡行・拡張させること——それが本論の目的だ。夏目漱石や森鷗外の漢詩がそうであるように、未明の漢詩もまた、足の踏み入れがある沃土である。

## 一、少年期の漢詩・漢文受容

本節では、小川未明の漢詩を読み解く前段として、少年期の未明が、漢詩・漢文をどのように学んでいたのか、明治中期の「漢学」受容をつまびらかにする。

新潟県高田の下級士族の家庭に生まれた未明は、小学校へ上がる以前から、地元の私塾で漢学を学んでいた。その塾は、旧高田藩御書物係で、高田師範学校書記を務めていた秋山重明という人物が経営していた小私塾で、上笙一郎によれば、「小川家からは道ひとつをへだてた近くにあった」らしい。<sup>(2)</sup>

未明はこの近所の塾で、『日本外史』や『論語』を読み込んでいた。後年、未明は当時を振り返って、「私は少年の頃、村の老先生について、漢学を学びました。学校から帰ると、懐中へ日本外史や、論語を入れて、その先生の塾へ通つたものです」(「青年に与ふ」『日本の子供』文昭堂、昭和一三年一二月)、「私は子供のころから漢学じゆく(塾)で漢詩や漢籍を学

び民族的な精神文化に興味を持ち東洋精神とでもいふか自分を理想にまで高め世道人心につくすという考え方を持っていたが、これは一生私を支配した」（『児童文学』の夜明けへ）「読売新聞」昭和二八年八月二四日）と、私塾での学習歴を回想している。

合山林太郎によれば、明治三〇年代以降、「漢学塾」の減少に伴い、「青年たちの漢文学についての知識・素養は減退していく」わけだが、その点、明治一五年生まれの未明は、少年期に私塾で漢学的素養を刷り込まれた、最後の方の世代にあたりと言えよう。

とりわけ、頼山陽の『日本外史』の印象は強烈だったようだ。未明は雑誌の企画で、愛読書や影響を受けた思想を問われた際、『日本外史』の名をたびたび挙げている。<sup>(4)</sup> また、戦中の座談会では、「私は子供の時分に一番感銘の深かったものは日本外史ですな、良く今でも覚えてゐますが、楠氏の章などを見る時は涙が出て止まなかつた。何度となく読みました。外史を懐に入れて歩きました。感慨無量だったですな」（小川未明先生に訊く 創作童話の座談会）「新児童文化」昭和一七年五月）とも語っており、「楠氏の章」——おそらく「桜井の別れ」の下り<sup>(5)</sup>——では、感涙させられた<sup>(6)</sup>。

漢文体で綴られた本書の勤王思想が、若き未明を感化した点は疑い得ない。<sup>(6)</sup> そしてその感化は、日中戦争・大東亜戦争下の天皇制賛美の伏線ともなっていたはずである。<sup>(7)</sup>

地元の高田中学校では、江坂香道と北沢乾堂に漢文を教わった。北沢は、幕末の思想家・佐久間象山の高弟で、小笠原諸島の島司を務めたこともある人物である。後年、未明自ら、「私は此人から漢詩の作り方など教はつた。後では此人の家に下宿して、其処から学校に通つた。そんな風だから、漢学には非常に趣味を持つて居た」（『三度中学を落第す』）「文章世界」明治四二年一二月）、「当時、土地で有名な学者の家に、寄寓して、親しく、詩の添削をしてもらひました。詩では、年少に似合ず、うまいといつて褒められた」（『漢詩と形なき憧憬』）「文章倶楽部」昭和四年三月）と回顧している通り、未明は北沢宅に下宿し、漢詩の指導を受けていたのである。

幸い、筋は良く、「学校で漢学の教師が違った発音をしたのを、自分が咎めたこと」(「雲の音を聞きながら いやないやな中学時代」「文章倶楽部」大正六年六月)もあつたらしい。「試験の時は大抵 cunning で、通つて居た」(「三度中学を落第す」同前)ほど、数学ができず、落第を繰り返していた未明にとって、漢詩・漢文は、劣等生たる自己が矜持とし得る、唯一の得意科目であつただろう。<sup>(8)</sup>

だからこそ、と言うべきか。漢詩・漢文に対する未明の向学心は、極めて旺盛だった。朝鮮人の亡命客が、高田に来訪した際は、自作の漢詩を携え、訪問。論評を求めている(「其の雄勁とさびしさ」「中央公論」大正一三年二月)。小田嶽夫によれば、この朝鮮人が滞在した宿は、「柳糸郷」という旅館らしい。<sup>(9)</sup>言葉が通じないため、会話は筆談で行つた(「漢詩と形なき憧憬」同前)。朝鮮人は未明の漢文を、笑いながら手直ししてくれたそうだ。漢詩・漢文への学習意欲がもたらした、若々しい行動力である。

課外活動としては、学校の文芸部に所属し、健筆を揮つた。当時の高田中学には、先述の江坂・北沢といった漢学者の他に、下村千別という歌人がおり、これらの教師に私淑する学生が、文芸部を構成していたのであつた。未明および同級の相馬御風も、その一人である。丸山敏子作成の年譜には、「学校では文芸部に入部。白洲・越声などの号を用いて、和歌・俳句・新体詩・紀行文・論評などを執筆」(明治三〇年)との記述がある。<sup>(10)</sup>未明は「白洲」「越声」といった雅号を用いて、漢詩に留まらない、多様なジャンルの文章を執筆していたらしい。<sup>(11)</sup>しかし、未明に関わる、これらの最初期の習作は散逸が激しく、文芸部の部誌(に類するもの)は、現状、確認できていない。

その他、未明は、地元の少年グループ「切憇会」にも所属し、機関誌「江碧山青」へ、複数の作品を寄せている。切憇会は、旧高田藩の下級士族が数多く居住した、高田五分一の子弟を中心として結成された少年グループで、小川一族もまた、五分一出身であつた。未明はこの団体について、次のように追思している。

その頃は今のやうな言文一致でなく、漢文直訳体で難しい文字を喜んで使った。特に漢詩を好んで読んだ。そして、自分でも詩を作つて少年雑誌に投書したこともある。文章を好む結果、いろいろな会を立てた。例へば文章研究会のやうなもので、「切偲会」と云つて、同好の少年が集つて、各自文章のことを研究したり、作つた文章を出し合つて一冊の本に綴ぢ、それを廻読して批評し合つたり、又村の学校に演説討論会と云ふものを設けて、演説の練習を為し、討論の筆記を拵らへて、それを各自に廻したりなどした。

「文章上達の順序」(「新文壇」明治四二年二月二日)

要は、五分一という地縁を共通の基盤としつつ、文芸と政治討論を活動の主軸に据える団体。それが、切偲会である。

切偲会における未明の文筆活動については、上笙一郎の論稿が詳しい。<sup>12)</sup>上の調査によると、「江碧山青」は「椽取りのある和紙に墨書きされた詩文類を集めて綴じ厚紙の表紙を附けた一部限りの雑誌」で、発行は季刊。計一一号が刊行されているけれど、文芸部誌と同様、散逸があり、上が視認しているのは、四・五・七・九・一一号の五冊である。

この内、未明の文章が載っているのは四号のみで、「白洲日」で始まる、短評が掲載されている。<sup>13)</sup>批評の対象となつているのは、仲間内の漢詩二篇(無署名「月夜劍舞」、越海生「今ノ時節柄ニ就テ」、和歌一篇(越海生「秋の木の葉のちりをるは実にさびしき始なりける」、評論一篇(無肋骨生「上杉輝虎論」)の計四篇。漢詩に対しては、「字二平仄ナク句ニ韻ナシ」などと、なかなか手厳しい。上は、この漢詩評を捉えて、「当時の未明がその文学的表現に際してもっとも自信を持っていたのは漢詩であり、それだからこそ、上杉謙信論に次いで仲間たちの漢詩に批評・感想を加えないではいられなかったのだ——と見て誤たぬであらう」と、未明の漢詩への自負心を指摘している。

数学試験のカニングを摘発され、三度目の落第を余儀なくされた未明は、結局中学校を中退し、明治三四年、東京専門学校(後の早稲田大学)へ進学する。だが当初は、早稲田ではなく、二松學舎で「漢学」を学ぶことを希望していたようだ

〔三度中学を落第す〕「文章世界」同前。早稲田の試験に落ちた場合は、二松學舎で「支那文学」を修めるつもりだった旨の発言も残っている（「小川未明先生に訊く 創作童話の座談会」「新児童文化」同前）。

ことほど左様に、少年未明の漢詩・漢文への熱意は、一方ならぬものがあつたのである。

## 二、雑誌「中学世界」への投書

少年未明の漢詩に対する熱意は、雑誌への投書というかたちでも、火を吹いた。舞台となつたのは、博文館発行の投書・受験雑誌「中学世界」である。

「中学世界」は、明治三二年九月、「少年文集」と「外国語雑誌」という、博文館の二つの雑誌を統合して生まれた中学生向けの読み物だ。紅野謙介によれば、「中学世界」創刊の背景には、明治一九年の第一次中学校令以来、中学校がエリートマーケットの登竜門と位置付けられ、中学生およびその志願者が急増し、彼らを対象とした市場が成熟していた事情があるという。<sup>14</sup>

本誌の目玉は、雑誌全体の三分の一ほどを占める投書欄「青年文壇」である。これは、普通文・書簡文・和文・漢文・英文・新体詩・漢詩・和歌・俳句等、様々なジャンルの文章を募集の上、良作を掲載する欄で、特に優れた作品には「優等者懸賞品」が授与された。一種のインセンティブと言えよう。

かくして、「青年文壇」は活況を呈し、創刊翌年の明治三二年からは、全編投書で構成した臨時増刊号が、年四回、季刊で発刊されるに至つた。閑肇が指摘するように、「投書という行為は、雑誌メディアへの自主的自発的な参加形態であり、それに注がれた青年たちの情熱は、学校教育において抑圧された自己表現への欲求の開放であつた」のである。<sup>15</sup>

そして、数学と教師を嫌い、「学校は極めて不快な厭な処でありました」「毎日出るのが厭でたまりませんでした」（「予の廿歳頃 大変化のあつた歳」「中学世界」大正七年一月）と語る劣等生未明も、同誌に「自己表現」を求めた一人であつ

た。<sup>16</sup> 未明が高田中学に在籍していたのは、明治二八年四月から三四年三月——満年齢にして一三歳から一八歳——までの六年あまりだが、今回、明治三一年九月（一卷一号）から三四年四月（四巻五号）までの「中学世界」を調査したところ、漢詩六篇、和歌一篇、俳句三篇の、計一〇篇の作品が確認できた。<sup>17</sup> この内、福田清人が紹介している漢詩五篇を除く諸作品は、本稿で初めて公にされる新資料である。

以下、本節では、これまで白文のまま放置されてきた五篇の七言絶句と、今回新たに発見された一篇の五言絶句に、訓読文（読み下し文）・語釈・通釈を施すとともに、押韻・平仄の形式を明らかにしたい。漢詩脇の○は平を、●は仄を、それぞれ表す。なお、編集部によって、あらかじめ題が設けられている場合は、題詠と記した。

① 越後・小川健作「梅溪棹舟（梅溪舟に棹さす）」（「中学世界」明治三二年三月二〇日）

香雲十里棹梅溪	香雲十里	梅溪に棹さす
山秀水清魂欲迷	山秀で	水清く
知是洞天距非遠	知る是れ洞天	距つること遠からざるを
綿蠻聽得一鶯嘯	綿蠻 <small>めんぱん</small> 聽 <small>き</small> き得 <small>え</small> たり	一鶯 <small>いちおう</small> の嘯 <small>な</small> くを

※溪・迷・嘯は上平の齊。題詠。

【語釈】▼香雲 芳しい雲。▼梅溪 梅の咲く溪谷。▼洞天 神仙のいる場所。洞天福地の略か。▼綿蠻 小鳥、またはその囀る声。『詩経』小雅・綿蠻篇に「緜蠻黃鳥」とあり、朱熹『集伝』に「緜蠻鳥聲」とある。▼嘯 「啼」と同じく、なくの意。

【通釈】芳しい雲が十里にたなびく中、梅溪に舟を進める。山は美しく、水は清い。私の魂は恍惚とし、体から彷徨い出て

しまいそうだ。この分だと、神仙の世界も遠くはなからう。鳥の鳴き声が聞こえた。一羽の鶯が鳴いているのである。

② 越後・小川健作「哭友死（友の死を哭す）」（「中学世界」明治三十二年九月二五日）<sup>19</sup>

冷雨蕭蕭うた 愁うら 冷雨蕭蕭 愁うた 愁うらを惹く  
 何堪り此際り失良儔り 何ぞ堪えん 此の際 良儔りを失うを  
 墓前そと来そと濺そと滿腔そと涙そと 墓前そと来そとたり 濺そとく 滿腔そとの涙  
 風拂ぜんりん禪林ぜんりん聽ぜんりん雨ぜんりん声ぜんりん 風は禪林ぜんりんを拂い 雨声ぜんりんを聴く

※愁・儔は下平の尤、声は下平の庚。

【語釈】▼蕭蕭 物寂しい音の形容。▼良儔 良い友人。▼禪林 禅宗の寺院。

【通釈】冷たい雨が物寂しく降り、いよいよ、愁いを感じる。このような時に、良き友の死を、どうして堪え忍ぶことができようか。私は友の墓前へ来て、滿腔の涙を流す。風は禪林の間を吹き抜けている。雨声が聴こえる。

③ 越後・小川健作「初冬偶成」（「中学世界」明治三十二年二月三日）

老嫗ろうお不語織めんき棉機めんき 老嫗ろうお語めんきらず 棉機めんきを織めんきる  
 朔雪しやくせつ帶風たいふう窓外まどがは飛と 朔雪しやくせつは風を帯び 窓外まどがはに飛とぶ  
 落魄らくはく多年たねん南北なんぼく客きやく 落魄らくはく多年たねん 南北なんぼくの客きやく  
 何時いつ業わざ就しゆ故郷こきやう歸かへ 何時いつの時ときか 業わざ就しゆりて 故郷こきやうへ歸かへらむ

※機・飛・帰は上声の微。題詠。

【語釈】▼老嫗 年老いた女。ここでは老母の意。▼織棉機 出典は、劉向『列女伝』、李瀚『蒙求』等に見られる「孟母断機」の故事か。▼朔雪 朔は北の謂。北の雪。▼落魄 落ちぶれて、志を得ないさま。杜牧「遣懷」に「落魄江南戴酒行」とある。▼南北客 杜牧「漢江」に「南去北来人自老」とある。▼業 学問。

【通釈】老母は黙したまま、棉機を織っている。北の雪は風に乗る、窓の外を飛んでいる。一方、私はと言えば、落ちぶれて志を得ず、諸方へ放浪中の身だ。いつの日か学問を成し遂げ、故郷へ帰ることができるだろうか。

④ 越後・小川健作「吉野懷古」(「中学世界」明治三三年四月五日)

孤○箒○吊○古○意○凄○然○  
孤○り○箒○つ○き○て○古○を○吊○え○ば○ 意○凄○然○た○り

花○落○花○開○五○百○年○  
花○落○ち○ 花○開○き○ 五○百○年○

一○鳥○不○鳴○春○寂○莫○  
一○鳥○鳴○か○ず○ 春○ 寂○莫○

南○山○空○鎖○御○陵○煙○  
南○山○空○し○く○鎖○ぎ○す○ 御○陵○の○煙○

※然・年・煙は下平の先。

【語釈】▼吉野懷古 吉野は奈良県吉野町の吉野山を指す。同所の自然や南朝への感傷を歌った著名な日本漢詩(七言絶句)に、藤井竹外・河野鉄兜・頼杏坪(あるいは梁川星巖)の「芳野三絶」、國分青厓・加藤天淵・土屋竹雨の「後芳野三絶」がある。未明が好む頼山陽も「芳山三首」を残した。▼箒 竹の杖。▼凄然 寒々しく、傷ましいさま。▼寂莫 非常に物寂しいさま。▼南山 吉野山。鎌倉末期、同地に南朝を開いた後醍醐天皇は、「玉骨ハ縦南山ノ苔ニ埋ルトモ魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ」(『太平記』卷二一)と遺言したとされる。▼御陵 吉野山の後醍醐天皇陵。▼煙 春霞。

【通釈】独り、竹の杖について古都・吉野山を訪れたところ、私の心は、凄絶な傷ましさに満ちる。この地の桜は、南北朝





## 三、飯田庄八宛書簡

さらに、もう四つ、未明漢詩を精読しよう。明治三三年三月、当時、満一七歳の小川未明が、高田中学の同級生で同じ文芸部員の、飯田庄八へ送った書簡に封入されていた漢詩である。

この漢詩を発見したのは、児童文学研究家の上笙一郎である。書簡の入手経緯について、上は次のように記している。<sup>20</sup>

当時（小川白州<sup>アヲ</sup>）の雅号を用いて未明の書いたこれらの詩文は、大半がすでに失われて伝わらないが、しかし近年、未明が同級生の飯田庄八に送った書簡数通が発見され、そのなかに封入されていた十数篇の詩文を、遺族の好意でわたしは複写させてもらうことができた。それらに依ってみると、当時の未明の作品は、和歌・俳句・新体詩は平凡極まるものばかりで、漢詩にやや才能のひらめきが見られるように思われる。

上は「遺族」——誰の遺族かは明示されていない。飯田庄八か——の保有する「書簡数通」を閲覧した後、「十数篇の詩文」を複写し、「やや才能のひらめきが見られるように思われる」漢詩二篇（⑦⑧）と「美術に於ける画と文章」（明治三三年八月四日）と題された評論一篇を、本書へ全文引用した。

時を追って上は、別の論稿で、新たに漢詩二篇（⑨⑩）と、「いささ川」（明治三三年三月二二日）という題の新体詩一篇、俳句三篇（「夜嵐に椿の落つる音志きり」「詩なきものは無用と榜す梅が庵」「里川に女水くむ月夜かな」）の計六点の新材料を一般公開している。<sup>21</sup>

上によると、これらの諸作品は、評論一篇を除き、いずれも明治三三年三月二四日付の書簡に収められていたものだ。手紙には冒頭、「然ては追手ながら近作二三差上候。何れも自分ながら感心の作とて一つも無之、誠に汗顔の次第に有之候」



⑧ 小川白洲「春夜宿山寺（春夜山寺に宿す）」（飯田庄八宛書簡、明治三三年三月一七日作）

一鳥不啼日没楼 一鳥啼かず 日は楼に没す  
 晚来冷氣似初秋 晚来の冷氣 初秋に似たり  
 山椿花散仙林静 山椿 花散りて 仙林は静なり  
 雲伴高僧幽更幽 雲は高僧を伴いて 幽更らに幽なり

※楼・秋・幽は下平の尤。

【語釈】▼晚来 日暮れ方。▼初秋 秋のはじめ。陰暦の七月。▼山椿 山に自生している椿。春の季語。『万葉集』（巻七）には、「あしひきの山椿咲く八峯越え鹿待つ君が齋ひ孀かも」（詠み人知らず）の歌がある。▼仙林 世俗離れのした林。▼高僧 徳の高い僧侶。

【通釈】鳥は一羽として鳴かず、日は楼に没した。日暮れ方の冷氣は、初秋のように冷たい。山椿の花は散って、仙林は静かである。空を見上げると、雲と高僧が連れ立って、山の雰囲気はいよいよ幽玄である。

⑨ 小川白洲「哭外山博士死（外山博士の死を哭す）」（飯田庄八宛書簡、明治三三年三月二二日作）

客年来説語悠悠 客年来説 語悠悠たり  
 誰知英雄死別秋 誰ぞ知る 英雄死別の秋  
 雪暗霏霏春寂寞 雪暗く霏霏として 春寂寞  
 悲風行尽四方州 悲風行き尽す 四方の州

※悠・秋・州は下平の尤。



く、春なのに極めて物暗い。舟と前村との間を霧が隔て、村の燈火が淡く光っている。

#### 四、未明漢詩の技巧と思想

以上、七言絶句・五言絶句を併せて、一〇編の未明漢詩を鑑賞してきた。次いで、本節では、これらの漢詩が具有する技巧（技術的な質）と思想（内容的な特質）を分析するとともに、習作期の漢詩と後年の小川未明の文学世界との間を結ぶ質的連続性を指摘したい。

技巧に関しては、押韻・平仄・出典の三つの観点から検討する。押韻とは、句の末字に脚韻を施すことで、偶数句＋七言詩の場合は初句で韻を踏むのが、作詩の基本的な約束事となっている。平と仄の二つの音の内、韻で使用しているのは平だけ。しかも、上平一五、下平一五の計三〇種の韻のグループ——「韻目」と呼ぶ——の中から、同じグループの漢字を用いて、全体を統一しなければならない。なかなかルールが細かいわけだが、未明の押韻は、右記の条件をほとんど完璧にクリアしている。意識的な努力の賜物だろう。

例えば、①「梅溪棹舟」の結句で、「嗚」（上平・齊）という見慣れない漢字を使っているのは、韻目を揃えるために違くない。通常の「鳴」（下平・庚）を使った場合、統一が乱れてしまうからである。また、②「哭友死」は、起句・承句（下平・尤）と結句（下平・庚）で韻目を異にするものの、同じ下平ということで、ギリギリ足並みを揃えている。あるいは、⑩「春郊矚目其ノ二」の転句「昏恨」は、本来「昏昏」の字が正確だが、「昏」（上平・元）が平字のため、仄字である「恨」を、あえて当て字風に使用しているのである。未明の苦心の痕跡が窺える。

次いで、平仄は、漢詩の詩句に課せられた、音の規則性のことである。平と仄の関係は、五言詩の場合、二四不同、七言詩の場合、二四不同・二六対でなければならない。その他、五言詩の二字目、七言詩の四字目が平の場合、その前後を仄で

囲んではいけない孤平（●○○）の禁や、下三字を同じ音にはいけない下三連（○○○／●●●）の禁というルールがある。内、二四不同・二六対・孤平に関しては、いくつか例外があるものの、未明の漢詩は、基本的には、これらの制約に準じたものだ。未明は漢詩を創作する際、『古詩韻範』『詩語粹金』『詩韻群玉』といった教本を参照していた由、回想しているが、勉強の成果であろう。技量は高い。

出典は、詩句の背景にある題材のことである。和歌の本歌取りのように、先行する漢詩・漢学の素養を踏まえて、自作を構築できれば、学が深いと言える。その点、③「初冬偶成」は注目に値しよう。起句の「老媪語らず棉機を織る」は、劉向『列女伝』、李瀚『蒙求』等に見られる「孟母断機」の故事を参照していると考えられるからである。これは、勉強をやめて帰宅した孟子を見た母が、機織り中の織物を切り裂き、「お前が途中で学問を投げ出すのは、私が作りかけの織物を断ち切るのと同じである」と、息子を叱責したエピソードで、機織りに励む母と学業を怠ける息子という構図が、「初冬偶成」と酷似している。本詩の起句は、二四不同・二六対の法則が崩れているのだけれど、未明は「孟母断機」の故事を引くために、あえて禁を破っているのである。

また、転句の「落魄多年南北の客」は、杜牧「遣懷」「漢江」（語釈参照）あたりが典拠だろう。さらに、④「吉野懷古」は、「吉野三絶」「芳山三首」（語釈参照）といった日本漢詩の伝統を踏まえた作詩であろうし、⑦「春江夜曲」は、未明が『唐詩選』の愛読者だった事実<sup>23</sup>に照らすと、張若虚「春江花月夜」を下敷きにした作詩であると考えられる。未明の学は深い。<sup>24</sup>

さて、それでは、これらの技巧巧みな漢詩群には、いかなる思想（内容的な特質）が胚胎し、それは後年の未明の文学世界と、どのような質的連続性を有しているのだろうか。ここでは、三点特性を指摘したい。

第一の特性は、赤（紅）色に対する嗜好である。①「梅溪掉舟」の「梅溪」、④「吉野懷古」の「花落花開」、⑤「題嵐峽図卷」の「彩雲」「櫻花萬朶」、⑥「江村霜曉」の「曉鷄」、⑧「春夜宿山寺」の「日没樓」「山椿」、⑩「春郊矚目其ノ二」

の「燈火」と、未明の漢詩作品には赤色が横溢している。新資料として二節末で紹介した雑誌「中学世界」投書の俳句や、三節で紹介した飯田庄八宛書簡封入の俳句を見ても、「梅」「夕ひばり」「茜」「散り紅葉」「椿」「梅が庵」と赤色の点在が確認できよう。

翻って、私たちの知る後年の未明も、自作に赤のモチーフを多用していたのであった。今、試みに、任意の作品を挙げれば、「赤い船」(明治四三年)、「紅い入日」(明治四四年)、「鮮血」(大正三年)、「野薔薇」(大正九年)、「赤い蠟燭と人魚」(大正一〇年)、「血の車輪」(大正一一年)、「黒い人と赤い櫓」(同上)、「赤いガラスの宮殿」(昭和四年)、「赤土へ来る子供たち」(昭和一四年)、「赤いげた」(昭和二七年)等、その実例は枚挙に暇がない<sup>25</sup>。未明の赤好みは、既に少年の日の習作時代から、芽吹いていたのである。

第二の特性は、鳥(鶏)に対する嗜好である。①「梅溪掉舟」の「綿蠻」「一鶯」、④「吉野懐古」の「一鳥」、⑥「江村霜曉」の「曉鶏」、⑧「春夜宿山寺」の「一鳥」と、鳥は、未明漢詩の舞台を彩る主要な役者として頻出している。前掲の俳句「夕ひばり高く茜に入りにつけり」は、未明の鳥と赤への嗜好が混淆する、極めて特色溢れる一句と言えよう。

そして、赤と同様、鳥もまた、後に作家として名を成した未明が愛用する重要語なのであった。「海鳥の羽」(明治四〇年)、「燕と乞食の児」(明治四三年)、「木と鳥になつた姉妹」(大正九年)、「小鳥の死」(大正一一年)、「駒鳥と酒」(大正一三年)、「兄弟の山鳩」(大正一五年)、「幸福の鳥」(昭和三年)、「雀と鶉の話」(昭和五年)、「子鶯と母鶯」(昭和一一年)、「よろこびがらす」(昭和三一・三二年)等、こちらも例証には事欠かない。未明はエッセー「小鳥の思ひ出」(「野鳥」昭和一一年七月)で、幼少期以来続く、鳥への愛心を語っているが(「私は、夜の明けるのを待つて、幾たび、飼つてゐる小鳥を逃がしてやつたか知れませんが」)、その愛念は、早くも中学時代の詩句の上に反映されていたのである。

第三の特性は、前二者ほど一般化できないのだが、一部の作品に、南北の対比構造が窺える点である。滑川道夫はかつて、「南」と「北」の対比構造が未明の一つの美学といえますか、未明自身の表現のレトリックの基本的なパターンの一つ

として、あるような気がするわけです」と述べ、「港に着いた黒んぼの話」（「童話」大正一〇年六月）等を例示しながら、未明の表現形式の基本形に、南北対比がある旨、指摘した。<sup>26</sup>滑川によれば、「南」には都会・理想・富・陽気・退廃・春といった要素が、「北」には故郷・現実・貧困・陰鬱・冬といった要素が、それぞれ象徴されているのだという。<sup>27</sup>

③「初冬偶成」は、この分析を援用して読み解くことが可能だろう。すなわち、「老嫗」が「綿機」を織る「朔雪」の世界（北）には、故郷・現実・貧困・冬のイメージが、目下「落魄多年」中でありながら、学業で成功し、故郷へ錦を飾らんとする青年（「何れの時か業就りて故郷へ帰らむ」）の世界——高等教育機関のある都市空間——（南）には、都市・理想・富・退廃のイメージが、各々仮託されているのである。未明の南北対比のレトリックは、少年期の漢詩において、その原型が確認できる。

このように、高田中学時代の小川未明は、押韻・平仄・出典を巧みに駆使する、大変優れた漢詩の詠み手であった。また、それらの詩作には、後年の未明の文学世界と通底する要素が複数伏在していた。未明の教養の核が漢学であり、文学創作の起点が漢詩であるという事実を、私たちは再評価しなければならない。

## 五、日本近代漢詩史上の位置——明治期漢詩ブームの外縁

さて、ここまで筆者は、少年未明の五言絶句・七言絶句について、なるべく精細な鑑賞と評価を行ってきた。最後に本節では、視点を少し引き、これらの漢詩が、日本近代漢詩史上において、どのような位置を占めているのか、巨視的な視座から考察を加えたい。

まず、明治維新以降の日本近代漢詩史の流れを、簡単に整理しよう。明治期の漢詩史を捉えるに際し、重要なポイントは、その頃、漢詩は存外に廃れていなかった、否むしろ、流行ってさえいたという点である。

この点について、猪口篤志は「明治の時代は西洋の文物輸入に急であったから、漢文学もその影響を受けて衰微の一途を辿ったように考えられがちであるが、事實は逆で、詩学に於ては空前の進展を遂げた」と、村山吉廣は「明治維新と言えは「文明開化」が同義語のように思われ、旧時代の学問の中心であった漢学は一斉に退潮したと考えられがちであるが、事實そうではない。むしろ明治は中期ごろまで「漢学愛好」の時代であった」と、それぞれ述べ、一見反時代的な漢詩・漢文の隆昌を指摘している。<sup>(28)</sup> 維新以後、欧化政策によって漢文学が一扫されたと見るステレオタイプは、完全な誤りなのである。

では何故、この時期、漢詩は「空前の進展を遂げた」のだろうか。猪口は、同書で、その要因を四つ挙げている。すなわち、①統治者層の漢詩愛好、②私塾・詩社の創立、③出版ジャーナリズムの発達、④中国の文士との交流の四点である。

①は、当時、社会的影響力のあつた指導者層の多くが、漢詩愛好者であつた事実を指す。政治家では、西郷隆盛・大久保利通・伊藤博文、文人・学者では、鷲津毅堂・三島中洲・岡鹿門等、漢詩好きの実力者は各界に遍在していた。②は、漢詩・漢学の私塾や詩社が、相次いで設立・運営されていた事実を指す。私塾では、安井息軒の三計塾、大沼枕山の大沼学舎、島田篁村の双桂精舎、詩社では、森春濤の茉莉吟社、鱸松塘の七曲吟社、成島柳北の白鷗吟社等が、それにあたる。③は、出版ジャーナリズムの進展に伴い、創作と批評の往還を可能にする発表媒体が次々と創刊されていた事実を指す。専門雑誌では、森春濤の「新文誌」、佐田白茅の「明治詩文」、大江敬香の「花香月影」等が生まれ、新聞では、「毎日新聞」「日本新聞」「朝野新聞」他多数が、漢詩の投書欄を設置していた。④は、主に、清国の公使館員との交遊を指す。<sup>(29)</sup>

右記のような諸要因が絡み合った結果、明治の漢詩壇は、森春濤・槐南親子を中心として、空前絶後の活況を呈することとなる。さながら、百花斉放の様相と言つてよい。同時期、大町桂月は「ただ廃滅するなるべしと期したりし漢詩が、却つて盛になり、且つ上手になりしことは、吾人の不思議に思はざるを得ざる所也。漢籍入りてより二千年、漢詩を作る伎倆の発達せると、未だ明治時代の如きものあらず。(中略) 明治二十年代は、実に漢詩全盛時代なりき」(「明治文壇の奇現象」『筆のしづく』文禄堂、明治三六年七月)と評しているが、この同時代評は、かかる時代の趨勢を如実に伝えている。<sup>(30)</sup>

だが、上記の漢詩ブームは、決して長くは続かなかつた。木下彪が「我が王朝以来、千年の伝統を有する漢詩は、明治に至つて未曾有の發展を遂げ、明治十年前後から三十年代初期まで其の全盛を極め、以後は衰落の一途をたどつた」と指摘するように、<sup>(31)</sup>明治三〇年代中頃以降、漢詩愛好者の数は減少の一途を辿り、新聞や雑誌の漢詩欄は相次いで廃止されていったからである。結果、漢詩創作は国民的なメディアを失い、大正・昭和期へ入ると、一部の好事家の手遊びに過ぎなくなってしまう。<sup>(32)</sup>

このような地位転落の背景には、欧化教育の本格化に伴う漢学塾の衰退や、日清戦争の勝利によつて生じた中国文化への蔑視が考えられよう。<sup>(33)</sup> いずれにせよ、燈滅せんとして光を増す最後の輝きを経て、漢詩はメジャーな文芸からマイナーな文芸へと凋落してしまつたのである。

さて、以上が、明治維新以降の日本近代漢詩史のおおまかな見取り図であるが、ここで話を未明に戻したい。本節の課題は、かかる詩史における未明漢詩の位置を、抜き取り測定することであつた。筆者の結論は、少年未明の漢詩は明治期漢詩ブームの外縁に位置付けられ得る、というものである。どういふことか。

一節でも記したように、未明は明治一五年生まれの明治人なわけだけれど、その少年・青年初期は、上述の漢詩絶頂期と一致していた。未明が雑誌「中学世界」や友人・飯田庄八へ自作を送つていたのは、ちょうどこの時期（明治三二～三三年頃）なのである。逆に、東京専門学校（早稲田大学）入学後の創作の主戦場はもっぱら小説であつて、中学在学時以外に物した漢詩は、現状確認されていない。してみれば、未明は明治中期、漢詩が流行している最中、漢詩に熱中し、流行が去るや漢詩を捨てた、明治期漢詩ブームの落とし子とも言える存在であることが確認できよう。

ただし、未明は何分、地方住まいの若輩者であつたから、投書先は青年誌・地方紙に限定されていたし、中央の漢詩壇のお歴々から評価を受けていたわけでもない。未明の詩作が、明治期漢詩ブームの中心ではなく外縁に位置付けられ得るといふのは、まさしく、その意味においてである。

ところで、未明のような作詩能力を持つ若者は、同時代的に見て、決して特異な例外ではなかった。その点、「中学世界」の他の投書者もさることながら、永井荷風や河上肇といった同世代（明治一二年生まれ）の文人が、優れた漢詩を残している事実は、注目に値する。永井家は、父・永井禾原、外祖父・鷲津毅堂ともに漢詩を紡ぐ、漢詩一家であったし、河上は未明同様、幼少期に漢学者のもとで頼山陽『日本外史』を学んでいた<sup>34</sup>。三者とも、物心が付く以前から、漢学を体得せざるを得ない環境に身を置いて／置かされていたのである。家風や家柄にもよるけれど、ある時点までの日本では、そのような教育環境が、ごくあたり前に存在していた。

入谷仙介は「明治一〇年ごろを境に、それ以後に出生した人人は、漢学的教養がそれ以前に比べて稀薄になってき、新しい漢詩人が生まれにくくなる」と、森岡ゆかりは「明治十年、明治二十年と、生まれ年が後になればなるほど、漢詩を作る人が減少します。子どもの時の学習すべき内容に占める漢詩漢文の比率が相対的に減っていくことも、漢詩漢文が自由に扱えなくなる要因となりました」と、それぞれ指摘しているが、明治一〇年代初・中期に生まれた彼らは、幼少時、漢籍へ親しみ、漢学的教養を血肉化した、最後の方の世代であると言えよう。

無論、明治一〇年代生まれの漢学的教養は、幕末から明治初期に生まれ育った夏目漱石・森鷗外・徳富蘇峰・幸田露伴・正岡子規・中野道遥らのそれに、到底及ぶものではない<sup>36</sup>。しかし、『懐風藻』以来受け継がれてきた日本の漢学の伝統は、小川未明の内部に確かに息づいていたし、その学知は、後続の児童文学作家には決定的に失われてしまった前近代の教養であったのである。

## おわりに

以上、本稿では、新潟・高田中学時代（明治二八〜三四年）に、小川未明——当時の健作少年——が紡いでいた、漢詩

(五言絶句・七言絶句)の検証を行った。

これらの漢詩は、従来、未明が作家になる以前の習作として、省みられることなく、白文のまま放置されてきたのだが、今回、新たに発見した新資料を交えて、分析の俎上へ載せたところ、次のような事実が明らかになった。すなわち、中学時代の未明は、押印・平仄・出典を使いこなす、大変優れた漢詩の詠み手であったこと、また、この時期の詩作には、赤(紅)好み、鳥(鶏)好み、南北対比といった、後年の未明の文学世界と連なる要素が複数備わっていたこと、日本近代漢詩史上、未明の漢詩は明治期漢詩ブームの外縁に位置付けられ得るということである。

夏目漱石・森鷗外・徳富蘇峰ら、江戸と明治の狭間に生まれた、明治の文人は、漢詩・漢文の素養を豊かに保持していたけれど、明治三〇年代以降、漢学塾の減少等に伴い、これらの漢学的素養は知識階級の間から失われていく。その点、幼少期に漢学塾で薫陶を受けた明治一五年生まれの未明は、明治一二年生まれの永井荷風や河上肇——二人とも漢詩を物した——と並び、かかる旧世代の教養を血肉化した、最後の方の世代に当たると言えるだろう。

小川未明の教養の核が漢学であり、文学創作の起点が漢詩であるという事実を、私たちは再評価しなければならないのである。

## 【注】

- (1) 福田清人「少年未明の漢詩——「中学世界」の投稿」(『定本小川未明童話全集』第三卷月報、講談社、昭和五二年一月)、上笹一郎「小川未明」(高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一月)、「中学時代の未明作品」(『定本小川未明童話全集』第二六卷月報、講談社、昭和五三年二月)。
- (2) 上笹一郎「小川未明」(高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一月)
- (3) 合山林太郎「幕末・明治期における日本漢詩文の研究」(和泉書院、平成二六年二月)
- (4) 「愛読書の憶ひ出」(『新潮』明治四三年四月)、「余の愛読書と其れより受けたる感銘」(『中央文学』大正八年四月)、「予の一生を支配す

る程の大いなる影響を与へし人・事件及び思想」(「中央公論」大正一二年二月)参照。

(5) 「童話を作つて五十年」(「文藝春秋」昭和二六年二月)には、「私は、敵に塩を送つた上杉謙信を崇拜して、神社を建てた父の影響を受け、塾へいつても、日本外史を泣いて教へる先生の薫陶を受けました。私も楠木正成が正行と別れる條りなどでは、泣いたものです」との記述がある。

(6) 未明は、戦時期の評論「青年に与ふ」(「日本の子供」文昭堂、昭和一三年一二月)で、「外史子曰く」と、老先生が声を上げて読まれる時、眼から涙が流れたのです。そして、私もまた泣いてゐました。終つて、家へ帰る道すがら、感憤して足は土に着かず、頭は茫然としてゐました。当時少年の胸にも、忠節のために、一身を犠牲にして惜まざる念が、烈々としてあつたのです」と、書き記している。また、戦後の随想「童話と私」(「改造」昭和二九年六月)でも、「今から思えばこの本もかなり封建的なものだつたかも知れない。しかし当時の私にとつては、そこに見られる正義のシンボルともいへば烈々たる勤王の志と、そのうちに秘められた思想・精神の高さや人間の真実を追求してゆこうとする鋭い気魄が好ましかつた」と、書き残している。

(7) 戦時下の天皇制賛美(家族国家観の信奉)については、拙稿「転向者・小川未明(下)——階級闘争から八紘一字へ」(「日本文学文化」平成二九年二月)で論じた。

(8) 同様の指摘は、森岡ゆかりも、『文豪だつて漢詩をよんだ』(新典社新書、平成二二年四月)で行っている。「登校拒否をしなくてすんだのは、得意な科目があつたからでした。それが漢文だったので」(「小川未明は数学が不得意でも、劣等感の塊になつたりしませんでした。未明は漢文によって自負心を維持することができたのです」)

(9) 小田嶽夫『童話のおじさん 小川未明物語』(理論社、昭和三九年五月)

(10) 丸山敏子「小川未明年譜」(日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書3 小川未明』野島出版、昭和五二年一〇月)

(11) 上笙一郎は「未明」に至るまで(『定本小川未明小説全集』第六卷月報、講談社、昭和五四年九月)で、未明が坪内逍遙にその名を与えられる以前、白洲・越声・桃涯という三つの雅号を遍歴していた旨、報告している。上は、「白洲」は太陽の直射を受けた砂洲が眼前に浮かんで陰翳がなく、「越声」は「越後の住人の声」というので意味が勝ちすぎ、そして「桃涯」は、情感ありとはいふもののセンチメンタルに傾いて底が浅い」と述べ、「意味と影像を持ち過ぎず」「余韻を感じさせ」る未明の名を、もっとも高く評価している。

(12) 上笙一郎「小川白洲」と「切偲会」(「信州白樺」昭和五五年四月)

(13) 「江碧山青」が発見された高田・金光寺の住職・峰箇祐備は、「昭和初年代から十年代にかけての時期までは全冊が欠けることなく揃つており、その創刊号をはじめ初期の号にはあきらかに小川健作と署名のある文章作品が載っていた」由、上笙一郎に語っていたらしい。

(14) 紅野は、「知的エリートへの「立身」の夢を抱きつつ、流動的で階級未分化な、しかも漸層的にふくれあがりつつあるこの宙づりの世代／集団が雑誌市場の消費者として狙い撃ちにされたのである」(「中学世界」から「文章世界」へ——博文館・投書雑誌における言説編成)「文学」平成五年四月)と述べ、同種の雑誌として「文庫」「中学文壇」の名を挙げている。

(15) 関肇「明治三十年代の青年とその表現の位相——「中学世界」を視座として」(「学習院大学文学部研究年報」平成六年三月)

- (16) 中学時代の投書歴について、後年、未明は「そこで、そういう自分の考えや気持（貧富の格差への憤懣など——引用者注）を文章に書いたり、漢詩にうたったりして、地方の新聞や、東京の雑誌、あるいは交友会誌に投稿したりしました。もちろん学校の作文にも自分の思うままに自由に書きましたが、それが当時の文章の型にあてはまっていなかったので、よく先生にしかったです。しかし、私は何度しかられても自由にも書くことをやめませんでした」（「常に希望をもつ」『中学時代』昭和二年六月）と、書き残している。「中学世界」以外の投書先としては、丸山敏子「小川未明年譜」（日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書3 小川未明』野島出版、昭和五年一〇月）が「新少年」を、岡上鈴江・滑川道夫「年譜」（『定本小川未明童話全集』第一四巻、講談社、昭和五年一二月）が「高田新聞」を、それぞれ挙げており、今回筆者は、「新少年」の投書欄も調査してみたが、管見の限り、未明の作品を発見することはできなかった。「高田新聞」は未調査である。
- (17) 岡上・滑川作成の講談社版全集の年譜には、「『中学世界』には漢詩・俳句・新体詩を投稿、たびたび掲載される」との記述があるが、新体詩の掲載は確認できなかった。
- (18) 福田清人「少年未明の漢詩——『中学世界』の投稿」（『定本小川未明童話全集』第三巻月報、講談社、昭和五年一月）
- (19) 当該の「中学世界」（二巻二二号）は、日本近代文学館・神奈川近代文学館のいずれも、マイクロフィルムに抜けがあり、原文を確認できていない。
- (20) 上笙一郎「小川未明」（高田文化協会編『郷土の小川未明』さ・さ・ら書房、昭和四七年一二月）
- (21) 上笙一郎「中学時代の未明作品」（『定本小川未明童話全集』第一六巻月報、講談社、昭和五三年二月）
- (22) 「その頃から私は、「初学便覧」だの「詩語粹金」だのを頼りにして、漢詩を作つては、青年雑誌や田舎新聞に投書した」（「雲の音を聞きながら いやないやな中学時代」『文章倶楽部』大正六年六月）／「日本外史」「古詩韻範」などは、中学時代、暑中休暇に山間の温泉へ行く時分にも提へて行つたものです」（「余の愛読書と其れより受けたる感銘」『中央文学』大正八年四月）／「詩語粹金や、詩韻群玉などといふ書物に纏つては、詩を作つた時分は、たとへば、梅花に対しては、春寒とか、凌屑とか、花如雪とか、いふ語句が、限らない詩情をそそつたのであつた」（「其の雄勁とさびしさ」『中央公論』大正一三年二月）。なお、版元は複数あるが、いずれの教本も実際に出版されている。
- (23) 「ずつと少年時代には「唐詩選」や頼山陽の「日本外史」「山陽詩抄」などを愛読した。以上挙げた書物は、私の文章を書く上に、最も大きな影響を与へたものである」（「文章上達の順序」『新文壇』明治四二年一二月二二日）／「しかし、白楽天の詩、李白の詩、高青邱の詩、その他詩経、古詩などは好きである。子供の時代には三体詩や、唐詩選などを愛誦したものである。詩はどちらかと云へば支那の詩が日本の詩よりも好きである」（「漢詩の面白み」『文章倶楽部』大正七年五月）／「童話を読んで特に感じたといふことはないですな、私は子供の時分には、やはり童話よりも寧ろ漢詩ですな、唐詩選とか三体詩とか……」（「小川未明先生に訊く 創作童話の座談会」『新児童文化』昭和一七年五月）／「私があの時分に読んだものは、頼山陽の「日本外史」「唐詩選」「四書五経」などの漢書でした。その時分に朗詠した詩は今も思い出します。少年期の読書の影響は大きなものがあると思います」（「童話に生きる」『中学時代』昭和二六年八

- (24) 出典と用例の判別は難しいのだが、これ以外にも、未明漢詩の詩句が、先人のそれを巧みに学び盗んだ結果である可能性は大いにあり得る。例えば、②「哭友死」の「蕭蕭」は李白「送友人」で、⑤「題嵐峽図巻」の「彩雲」は李白「早發白帝城」、「烟雨」は杜牧「江南春」、「空濛」は武元衡「嘉陵驛」で、それぞれ使用されている。
- (25) 続橋達雄は、「戦後の未明童話序説(2)」(『野州国文学』昭和五八年二月)で、「第一童話集のタイトル『赤い船』(一九一〇・一二)とか初期の小説『紅雲郷』(一九〇五・一一〜〇六・一)などを例に挙げるまでもなく、赤・紅色のもえるような強烈な色彩は、未明の作品をさまざまに情感をこめていりど」っている、指摘している。また、詩人・清水哲男は、「未明の赤」(『定本小川未明童話全集』第一六卷月報、講談社、昭和五三年二月)で、童話「赤い蠟燭と人魚」(『東京朝日新聞』大正一〇年二月一六〜二〇日)や「黒い人と赤い櫓」(『赤い鳥』大正一一年一月)を例に挙げながら、未明文学の基調をなす赤色に対する強烈な印象を語っている。
- (26) 滑川道夫「未明童話における南と北の思想——未明生誕百年記念講演」『日本児童文学の軌跡』理論社、昭和六三年九月)
- (27) 滑川は、「一般化している」と、「北」は「北国」であり「北方」であり、自分のふるさとの地域であり、その「現実」が「北」によって象徴化されています。「南」は理想の国としても扱われるが、地方に対する都会でもあり、一面退廃の花の咲くところでもあった」などと、自説を展開。中村三春は、滑川の分析について、「滑川説は、人物・主題中心に著しく偏っている未明童話研究のなかで、唯一、テクスト全体の構築性を考慮に入れた卓見と思われる」(『未明童話の様式論——『赤い蠟燭と人魚』を読み直す』日本児童文学学会編『研究Ⅱ日本の児童文学』第三卷、東京書籍、平成七年八月)と、高く評価している。
- (28) 猪口篤志「日本漢詩概説」(『新釈漢文大系 日本漢詩(上)』明治書院、昭和四七年八月)、村山吉廣『漢学者はいかに生きたか』(大修館書店、平成一一年一二月)。なお、同趣旨の発言は、安藤英男も『新訂 日本漢詩百選』(蒼土舎、昭和五八年三月)で行っている。「明治時代は、いわゆる欧化主義が社会の各層に滲透し、西欧の文物が急速に移入された時代であるが、しかし漢詩については、廃されることなく、むしろ、いよいよ普及して、漢詩人口を広げていった」
- (29) この点について、三浦叶は「明治の漢詩壇を見る時、その詩運を隆昌にした一因に、日支両国の文人の交遊、殊に清国公使館員とわが国の詩人たちとの交遊の影響があったことを逸してはならない。詩の本場の清国の公使館員と多勢の詩人たちが、度々一堂に会して詩酒の会を開いたことは、詩人たちの喜び楽しんだところで、そのわが詩壇に与えた刺激ははなはだ大きなものがあったであろう」(『明治漢文学史』汲古書院、平成一〇年六月)と述べ、日本の詩壇に与えた清国公使館員の影響の大きさを指摘している。
- (30) 明治期における、漢詩壇の意外な活況は、他の同時代評でも伝えられている。「漢詩が辞藻の形式に於て殆ど未曾有の發達をなせるは実に此等の評家と共に衆のうなづく所、就中槐南寧斎翁を始とし星社一門の人々が各自の特色を具へ措辞の縦横自在なるは何人も認むる事実なるべし」(無署名「彙報 漢詩人」『早稲田文学』明治二八年九月)
- (31) 木下彪「森槐南と国分青厓」(『明治文学全集』第六二卷月報、筑摩書房、昭和五八年八月)
- (32) 入谷仙介は、大正以後の漢詩の凋落について、「大正から昭和にかけて、もはや国民的基盤を喪失した漢詩は、幕末から明治初年生まれ

の生残りの老人を中心とした一部の愛好者の間に細々と存在を維持することになる」(『近代文学としての明治漢詩』研文出版、平成元年二月)と、記述している。

(33) 漢詩の衰微と日清戦争の勝利を関連付ける発言としては、次のようなものがある。神田喜一郎「明治も二十年あたりになると、漢文学の大家といわれた長老が、ぼつぼつ凋落しはじめ、そこへ日清戦争によって、日本が清国に勝ったことは、これまで中国の文化に対して日本人がもっていた尊敬の念を雲散せしめ、日本の漢文学は、俄かに衰滅してしまうのである」(『日本の漢文学』『岩波講座 日本文学史』第二六卷、昭和三四年一月) / 村山吉廣「明治二七・二八年(一八九四―五)における日清戦争の勝利は日本の国際的地位の向上をもたらした反面、朝鮮や中国との民族的対立を深め、勝利感によってこれらの諸国を蔑視する風潮を広めてしまった。新聞や雑誌で全国的支持を得ていた「漢詩欄」もこのころから次第に衰退に赴き、やがては廃止されるに至り、漢詩漢文作家も急速に減少することとなった」(『漢学者はいかに生きたか』大修館書店、平成一一年一二月)

(34) 永井荷風『下谷叢話』(春陽堂、大正一五年三月)、河上肇『自叙伝』第一卷(世界評論社、昭和二二年九月) 参照。

(35) 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』(研文出版、平成元年二月)、森岡ゆかり『文豪だつて漢詩をよんだ』(新典社新書、平成二二年四月)。

(36) 例えば、一海知義は、『漱石と河上肇』(藤原書店、平成八年一二月)で、両者の作詩技術には雲泥の差がある旨、次のように記している。「ただし、漢詩人としての夏目漱石と河上肇を、同じレベルで論ずることはできない。漢詩の作者として、技術の面から論ずれば、漱石の方が数等すぐれているといわねばならないだろう。漱石が、平仄はもちろんのこと、対句という高度な技巧を必要とする律詩に、多くのすぐれた作品をのこし、河上肇の遺作にはほとんど律詩がないことだけを較べても、技術面、あるいはその到達点での二人の差は、おのずから明らかであろう。また、詩中に用いられた典故の量と質、という点などからも、同じことがいえる」

い。  
 ※なお、漢詩の読解に際しては、二松學舎大学の牧角悦子先生より、多大なご指南を賜った。記して、御礼申し上げます。